

Title	ロバーツ著 ポアギユベール - Hazel Van Dyke Robert, Boisguilbert, - economist of the reign of Louis XIV, 1935.
Sub Title	
Author	下田, 博
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.1 (1937. 1) ,p.147- 157
JaLC DOI	10.14991/001.19370101-0147
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370101-0147">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370101-0147</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

しく陛下の費用に資するを得ると共に、充分なる貨幣を調達し保持するの手段たるを得可く、併せて全國民の富と繁榮とに資すること大なる可き方策として貨幣切下げを主張する。(ibid., pp. 15 ff.)

洵にヘインズに在つては、其の防貧の社會政策的見地は財政の見地及び産業政策的見地と相容れ相一致するものであつた。

### ロバーツ著「ボアギユヘル」

—Hazel Van Dyke Roberts, Boisguilbert, economist of the reign of Louis XIV, 1935.—

下 田 博

其の提唱せる論策が濟世の熱情に燃えたる文字を以て書き綴られて居るにも拘らず、社會經濟的環境の未成熟の故に、却て其れが世道人心を惑はし、世の統制規律を紊すものとして斥けられ、罰せられ、遂に不遇の裡に世を終れる先驅的思想家の例は之を史上に見ること頗る多い。今茲に紹介せんとする著書の主人公ピエール・ル・ペサン・シエール・ツ・ボアギユヘル(Pierre le Pesant, sieur de Boisguilbert)の如きも亦、佛蘭西自由主義經濟思想成立期に於ける一人の不幸なる殉教者であつた。彼の存在は、所謂曲學阿世の徒にして、其の阿諛追從的言説の故に、世に迎へられ、多幸なる生涯を送れる當時のサロン學者と正に好箇の對照をなすものである。一六四六年二月十七日を以てルウアン(Rouen)に生れ、一七一四年十月十日同地に於いて歿するまで、其の七十餘年の長き生涯を通じて、殆ど寧日すらなく、一にアンシャン・レジーム(Ancien régime)及びコルバールチスム(Colbertisme)に對する完膚なき批判と其の缺陷及び悪弊に對する痛烈なる駁撃とを敢てし、而して祖國佛蘭西の爲に其の眞に進む可き途を重

農主義的自由主義的國策樹立に在りと做して之を大膽卒直に披瀝したが、然も却て其の故に自らはオーベルヌ(Auvergne)への配流の憂き目を忍ばねばならなかつた彼は、即ち之れ自由主義の殉教者であり、故郷に容れられざる豫言者の一人であつたのである。

然も、此の報らるゝところ薄かりし改革者、先驅的自由主義者の生涯乃至業績は、爾來、殆ど顧らるゝこともなく、唯だ僅かにユジューヌ・デールがギョーマン全集の中に彼の諸著作を収録するに當つて、彼の生涯と業績との解説を試みて居るが、(Eugène Daire, Collection des principaux économistes, Tome I, Economistes financiers du dix-huitième siècle, 1851, pp. 151-161, Notice historique sur la vie et les travaux de Boisguillebert. 参照) 其れも彼の生涯と業績とに關する紹介としては餘りにも簡略に過ぐる嫌ひがある。だが、彼の生涯著作及び諸般の活動に關する記述に於いて、彼と時代を同じうせるヴォルテールは可成り種々なる錯誤を冒して居る(J. E. Horn, L'Économie Politique avant les Physiocrates, Paris, 1867, p. 74—参照)傳記書類(例へば Ph. J. Et. Vt. Guilbert, Mémoires biographiques et littéraires sur les hommes qui se sont fait remarquer dans le département de la Seine-Inférieure, etc., Rouen, 1812, 2 vol.)の如きも亦、頗る貧弱にして且つ誤り多き事實を傳へて居るに過ぎぬところを以て觀れば、前記デールの解説は、從來ボアギューベルの生涯及び業績の紹介に對して捧げられたる恐らく最大の勞作であつたと看る可きものである。

然るに、一八六六年「倫理及び政治學院」(Académie des sciences morales et politiques)が「ボアギューベルの生涯及び業績に關する懸賞論文を募集してより以來、此の「不當に忘却せられたる」(Horn, Op. cit., p. 45.)ルウマンの「一地方官の存在は強く學界の認識する所となり、其の「近代經濟學の「先蹤」(Horn, Op. cit., préface)と」

地位は愈々不動に確立せられるに至つたのである。當時、同學院は、應募論文中、オルン及びキヤデエ兩氏の論文を以て甲乙を附し難き名作なりと做し、遂に賞を兩氏に分ち與へた。後に公刊せられたる、オルン「フイジオクラフト以前の經濟學」(J. E. Horn, L'Économie Politique avant les Physiocrates, Paris, 1867.)及びキヤデエ「ル・ボアギューベル」(Félix Cadet, Pierre de Boisguillebert, précurseur des économistes, 1646-1714, sa vie-ses travaux-son influence, Paris, 1871.)の二著は即ち其れである。而して「二著共に、ボアギューベルの生涯を闡明し、其の著作の考證を行ひ、學説を紹介し且つ其の功過及び後世に對する思想的影響を論述せる點に於いて、後世の經濟思想史家の研究を裨益せるところは誠に甚大なるものであると云はなければならぬ。

二

所で、經濟思想史の研究は各個人の經濟思想の検討を離れて存し得ず、而して各個人の經濟思想は無論個々の經濟思想家の頭腦に宿るものである以上、吾々が經濟思想史の研究を爲すに當つて、先づ、一應、個々の經濟思想家の生涯、著作及び諸般の活動等、要するに、彼の個人的事情に就いて充分なる智識を持たねばならぬことは云ふ迄もない。併し乍ら、吾々は其れを以て能事了れりとなし得るか。若しも、然らば、斯かる經濟思想史の研究は遂に一種の傳記編纂の業と殆ど異なる所がなくならう。

經濟思想史の研究をして安價なる傳記作製、單なる學說羅列の業に墮せしめざらんがためには、吾々は、個々の經濟思想家の個人的事情、其の學說内容の丹念なる穿鑿を行ふと同時に、更に彼の生存せる時代の社會的諸關係に就いて明確なる認識を持たなければならぬ。蓋し「奥深く歴史を遡れば遡るほど、個人は……ますます非自立的なものとして、より、大なる全體に所屬するものとして現はれる。即ち初めは尙ほ全く自然的に家族において、及び

部族に擴大された家族においてそうであり、後には諸部族の對立及び融合から生れた種々なる形態の共同團體においてそうである。で、やうやく十八世紀において、「市民社會」<sup>ブルジョア</sup>においてはじめて、社會的結合の種々なる形態が、個々人の私的の諸目的にとつての單なる手段として、外部の必然として、個々人の前に現はれて来る。が、此の立場、孤立的個々人の立場をつくり出す所の時代こそは、正に、これまでのところ最も發達した社會的（該立場よりすれば一般的）諸關係の時代なのである。人間は、最も文字通りの意味で政治的動物（Zoon politikon）であり、單に社交的動物たるのみならずまた社會内でのみ自己を孤立化し得る動物である。社會外での、孤立の個人……は、共に生きて共に話す諸個人がなくて生ずる言語の發達といふにも等しい空想である。（カール・マルクス、經濟學批判、一八五九年、マルクス・エンゲルス全集、第七卷、第三八四頁—三八五頁）即ち、吾々の經驗内には社會より遊離せる純粹なる孤立人なるものは存しない。吾々の考察の對象たる個人は、常に、必ず、一定段階の社會内部に生存せる個人、従つて社會的に規定せられたる個人である。故に、個人の思想若くは活動は、其れが如何に自己の理想乃至抱負に依つて彩どられて居る場合と雖も、必ずや、何等かの意味に於いて、彼の生存せる時代の社會的諸關係を反映せるものであり、其れとの關聯に於いて存するものである。其の時代の社會と何等の關係なき理想を説ける思想の如きは、即ち空想か、然らずんば痴人の囁言かであるに過ぎないし、又其の行動にして社會に超然たる抱負に基けるものであるならば、其れは遂にドンキホーテたらざるを得ないであらう。人は其の生存せる時代の社會的諸關係に依つて殆ど決定的の影響を受けると云つて差し支へない。斯くて、吾々は、凡ゆる經濟思想に嚴然たる社會的制約の存することを認めざるを得ないのである。誠に、個人は此の制約の下に、思索し、行動する。従つて、個人の意識若くは活動が純粹に自由である筈がない。即ち、個々の經濟思想家の思想乃至行動を正確に理解せんがた

めに、其の思想若くは行動を制約する社會的諸關係に就いて明確なる認識を持つことが絶対に必要なる所以である。然るに、社會はまた自然に依つて制約せられる。即ち、一定の自然的條件は一定の社會を規定する。此の事は縷説する迄もなく明白である。だが、其の故に、自然的地理的條件の人類社會に對する影響を決定的と做し、遂に一種の宿命觀に墮するが如き素朴なる自然環境論は、固より、吾々の採るところではない。斯くては、人間は自然に直接左右せられる諸他の動物と毫も異なる所がなくなるであらう。成程、人間は、先づ自己に與へられたる體力と能力とに依つて制約せられ、更に彼の生存を條件づける外的自然の制約を受けるが、併し何時迄も其の儘で居るものではない。即ち、人類は一の自然力として自然の素材に對立し、自然の素材を彼自身の生活に役立つ形態に變形せしむるがために、自己の身體に屬する諸種の自然力なる、腕や脚、頭や手をば運動せしめる。彼は、此の運動に依つて、外的自然に働き掛け、之を變化せしめ、斯くすることによつてまた、彼自身の自然力をも變化發展せしめると共に、更に彼自身の裡に眠つて居る諸種の潜在的能力を實現し發達せしめるのである。

云ふ迄も無く、此の、人間の自然に働き掛ける行爲は、即ち、労働である。斯くて、人間の自然に對する關係は労働過程として現はれるのであり、而して労働過程こそが人類の生存を確保する基礎となるものである。之に依つて初めて人類は其の生存に絶対に必要なる物質的富をば自然から獲得し得るのである。だが、此の場合、人類が唯だ労働其れ自身に依つて、諸種の労働對象に働き掛け、其處から生活資料を採取して生存して居ると云ふだけに止まるならば、特に人類が諸他の動物と異なる所以は大して發見され得ない。然るに、人類は動物は動物でも「道具を作る動物」であり、而して道具即ち労働手段を作り、之を用ふるに至つて、茲に全く他の生物と決定的に區別せられるのである。誠に、労働手段の創造と使用とは、人類の労働過程の特色をなすものであり、而して人類が如何なる



程度に發達せる労働手段を有するかと云ふことは、彼が自然に對して働き掛けて、如何なる程度に豊富なる生活基礎を有するかと云ふことを推測せしむるものである。人類の労働過程に於いて労働手段の持つ意義は、斯くて、誠に決定的である。然も、既述の如く、人類は常に社會人なるが故に、人類の労働過程は一の社會關係たること勿論である。而して斯かる關係の下に労働過程が行はるとき、其れは即ち生産過程となり、生産過程に於いて人類が相互に取結ぶ關係は即ち生産關係であるから、生産關係は人類が其れに於いて取結ぶ關係たる生産過程其のものに依つて規定せられることは明らかであり、而して生産過程は労働過程の具體的表現なるが故に、其れは労働過程を規定する労働手段即ち生産手段若くは其の總概念としての生産力に依つて規定せられるから、一定の生産關係は、結局、生産力に依つて規定せられると云はなければならぬ。而して、生産力に依つて制約せられる生産關係は、生産過程従つて労働過程が社會存立の基礎條件たる意味に於いて、爾餘一切の社會的諸關係の基礎でなければならぬ。即ち、生産關係の總和たる社會の經濟的構造即ち所謂下部構造こそは、其の社會の政治的・法律的諸關係及び諸般の文化等の所謂上部構造の土臺を成し、之を制約するものである。而して、此の場合、勿論、上部構造の下部構造に對する種々なる働き掛けの存することは確認しなければならぬ。だが、規定者は飽く迄も下部構造であり、従つて究極的には生産力である。即ち、社會に於ける種々なる交互作用は生産力を究極の規定者として行はれる。生産力こそは社會の存續、變轉の究極の要因である。一定の生産力は之に對應して與へられる一定の生産關係の下に於いて發展し、而して總て其の生産關係との矛盾・衝突が其の生産關係の變轉を促すや、茲に其の社會の一切の上部構造の推轉が始まるのである。人々の意識及び行動も亦其の社會の生産力の發展従つて經濟的構造の變轉と共に推轉するのである。さればこそ、個人の思想及び活動の眞の理解は、彼の生存せる時代に於ける社會の經濟的機構の

全き把握を前提としなければならぬし、また個人の思想及び行動は之を其の社會の經濟的構造及び其の變轉との關聯に於いて考察する時にこそ、之を其の全貌に於いて、且つ其の本質を誤り無く把へることが出来るであらう。

## 三

今茲に紹介するロバーツの著書は嚴密に斯かる意圖から書かれたるものではない。だが、ざりとて、其れは全然經濟思想史研究に於ける經濟史的素養の缺如を暴露せるものでもない。即ち著者は「序論」に於いて「路易十四世治下の經濟状態」を取扱ひ、其の中で「佛蘭西歴史中最も暗澹たる時代の一つ」であつた路易十四世治世後半の經濟的窮狀殊に農村の慘狀を敘述して、先づボアギンベールの生存せる時代の社會經濟的背景を明確ならしめんと試みる。だが、然らば、當時の經濟的窮乏は何故に生じたか。其の一主因が極端なるマーカンチリズムの遂行に在ることとは周知のことに屬するが、然らば又何故に特に佛蘭西に於いてマーカンチリズム即ち所謂コルベールチズムが強行せられねばならなかつたか。更に、著者も指摘せる如く、幾多の對外的戰役は當時佛蘭西の財政的逼迫の重大原因をなしたが、然らば又何故に頻々たる外征が行はれねばならなかつたか。(拙稿、新マーカンチリズム、本誌、昭和八年十月號、第一二三頁—二四頁及び拙稿、フイジオクラアト直前の重農主義運動、本誌、昭和十一年一月號、第七一頁參照)著者が、是等の問題に觸れず、唯だ當時の經濟的窮狀の平面的敘述に止つて居るのは、聊か讀者に物足らぬ感を抱かしむるものではなからうか。

當時の社會經濟關係に對する著者の斯かる根本的檢討乃至分析の缺如若くは不充分は、總て著者が本書に於いて眼目とするボアギンベールの社會經濟思想を論述するに當つて、其の本質的理解を可成り困難ならしめて居るやうに考へられる。即ち著者は本論の第一乃至第三齣に於いてボアギンベールの生涯と彼の諸般の活動とを刻明に敘述

し、第四齣に於いて彼の著作を丹念に考證し而して第五齣以下全卷に亙つて彼の思想乃至學說内容を詳細に説述して居るが、併し其れ等は、動もすれば、所謂單なる個人の傳記的記述乃至學說の羅列に墮せんとする危険を多分に包藏せるものである。ボアギューベルの社會經濟思想が如何にして生じたか。其れが如何に發展したか。又其の思想の社會的特質は何處に在るか。凡そ是等の問題は單に彼の個人的事情の穿鑿若くは彼の思想の詳解のみを以てしては正當に理解し得らるゝものではない。然も之を彼の思想自體の研究のみに依つて解決せんとするとき、遂に其れが思想乃至學說の並列的羅列に終らざるを得ないことは蓋し當然のことであらう。著者は多分に此の弊に陥つて居る。斯くて、著者は、第五乃至第八齣に於いてボアギューベルの財政改革意見を、第九及び第十齣に於いて彼の社會經濟に關する基礎概念を、第十一及び第十二齣に於いて彼の貨幣・信用及び價值・價格理論を、第十三齣に於いて彼の地代理論を、第十四齣に於いて彼の經濟的均衡理論を而して第十五齣乃至最後の第十七齣に於いて彼の自由主義思想を論じて居るが、併し其れ等は唯だ簡別的平面的に述べられて居るに過ぎず、是等の理論相互間の有機的關聯若くは彼の思想的發展過程に就いては、遂に讀者は明確なる説明を著者から聞くことを得ないのである。

思ふに、著者も云ふ如く、「少數の個人が金殿玉樓に住み乍ら、大衆が極貧に喘げる」當時の佛蘭西の社會經濟的矛盾が、臆て不公正且つ苛酷なる税制に對する峻烈なる批判を生める時、ボアギューベルも亦初め之に和して其の財政改革意見を提唱した。然るに、當時の財政紊亂、經濟的窮乏を以て其の由つて生ずる根因にして廢除せられざる限り斷じて救濟せられ得ないと認めたる彼は、茲に、一時的糊塗の財政救濟乃至改革論者と袂別し、時弊の調査と其の原因の探求とに没頭するに至つたのである。其の著「富、金銀及び租税の本質に關する論評」(Dissertation sur la nature des richesses, de l'argent et des tributs, 1705)は即ち此の間に於ける彼の苦心の研究の成果であ

り、同書に於いて彼は當時に於ける國策たり又支配的イデオロギーたるマーカンチリズムを以て時弊の根因と做し、之に對して假借なき論駁を試みたのである。而して、マーカンチリズムの一大基調たる重金主義を論難し、嘗て神とまで崇められたる金銀を再び奴隸の地位に引下し、之に單なる交換要具としての意義のみを認め、嘗て輕視せられたる生活必需品に穀物を以て眞の富なりと唱道するに至れる彼が、茲から重農論に達するには一步にして足りし、彼の別著「穀物の性質、耕作、商業及び利害に關する論叢」(Traité de la nature, culture, commerce et intérêt des grains, 1705)は正に救農の急務なるを力説せるものであつた。所で、彼が尙農論を主張するに當つて、茲に彼はリカード地代論の先驅的思想を表明して居るが、併し固より其れは地代の理論的構成が主眼ではなく、其の目的は飽く迄も救農に在つたのである。等々、彼のソリダリテ(Solidarité)の思想も亦、農を本としての社會連帯を説く點に其の眼目があつたのである。農業が減ぶ時一切は亡ぶ、正に此の故に農業の尊重を計ることこそ、彼の社會經濟思想の基調をなせるものであつた。

既に彼の目的が救農乃至尙農に在るならば、其の目的は如何にして達成せらるべきであるか。穀價の人為的維持若くは強制的釣上げに依るべきであらうか。マーカンチリズムの拘束政策の弊害に反對せる彼に取つて、凡ゆる人為的強制的統制政策は固より排撃せられねばならない。即ち、彼は生産費補償穀價が、國家的法規に依つて得らる可きものでなく、關稅の廢止と輸出の完全なる自由、要之、一切の自由放任主義に依つてこそ得らる可きものであることを強調して、茲に、重農主義的自由主義者たるの旗幟を鮮明ならしめたのである。而して税制改革、重農主義及び經濟的自由主義等の諸點に於いて彼の提唱せる論策は後のフイジオクラートの先驅をなすものであり、斯くて彼が佛蘭西自由主義經濟思想成立史上に残せる功績は誠に不朽と云はねばならぬ。

併し乍ら、彼の斯かる思想的發展も、絶對王制とコルペールチスムの強行との弊害に喘ぎ乍ら、然も其の鞏固なる地方分權的封建制より結果せる封建貴族の根強き反抗勢力抑壓の爲に、新興都市の商人ブルジョワを愈々保護制規し、地主的貴族に獨立と闘争の手段を與ふる農業的發展を益々抑壓せざるを得ず、爲に極度の收奪を受けたる農村經濟の疲弊困憊と、同時に又、刷新の阻害、創意の萎靡に陥れる商工業の不振沈滞を現出して、茲に、何よりも先づ自由と農業との爲の闘士の出現を待望して居つた當時の佛蘭西の社會情勢に鑑るならば、決して偶然ではなかつたと考へられる。

然るに、著者が這邊の事情の考察を缺き、専ら彼の思想内容の簡別的平面的紹介のみに努め、殊に彼の自由主義思想をアダム・スミスの其れと對比し、兩者の内容的形式的類似を指摘して居るが如きは、決して無駄な穿鑿とは云はぬが、併し其の類似の故に彼の自由主義經濟思想家としての地位が價值附けられるものでもないし、又其れに依つて彼の思想に對する理解が深められるものもなからう。縱令、彼の自由主義思想がスミスの其れに比して甚だ素朴であり又不完全であるにしても、其の事の故に、彼が其の時代に先驅的自由主義者として立派に史的使命を果せる功績は決して没せしめらるべきではない。單なる思想的類似的探求に努めるの餘り、個々の思想家の生存せる夫々の時代に對する認識を蔑にするが如き研究態度は、如何なる場合と雖も、決して完全なる理解を得しむる所以ではない。

總じて、吾々の著者に對する不満は可成り多い。だが、オルン及びキヤデエ兩氏の著書出でて以來絶えて久しく顧みられざりし、此のルウアンの先驅的自由主義者が、今や自由主義的危機の唱へられる今日に於いて取上げられたことも意義深いものであるし、且又其れに依つて、乏しき佛蘭西經濟思想史學界を聊かなりとも潤ほしたことは誠に同政者として欣快に耐えなす。

(最後に、細點であるが、著者がボアギニェールの綴りを Boisguilbert とされて居るのは如何なるものであらうか。或は Bois-Guilbert と綴り、或は著者の如く Boisguilbert と綴る等、彼の姓名の綴りは當時の諸書類及び公文書に於いて種々様々である。彼の弟及び其の他の家族の者は多く Boisguilbert と綴つた様である。

併し乍ら、ルウアン小教區の登記簿——今日の所謂「戶籍謄本」(Actes de l'état civil)——には殆ど必ず Boisguilbert と記名せられ、且又彼自身の書翰にも殆ど常に同綴りにて記名せられた様である。(F. Cadet, Pierre de Boisguilbert, Paris, 1871.)の開卷第一頁所載の、ボアギニェールの書翰の一部の摸寫参照(従つて、此の綴りを採るべきであると考へられるが、著者が何等の理由なく、之を Boisguilbert と綴つて居るのは筆者の贊し得ぬ所である)(定價四弗五〇・丸善定價拾四圓八拾五錢)